



號八二三第・日五月七輯編局報情

札立の時

いま
同じ地果實盡く
安隊人は死闘する



眞實
週報

勝之勝之勝之

號八二三第・日五月七輯編局報情

週報 寫真

札立の時



いま
同じ地果爾爾に
安隊六人は死臨する

勝之勝之勝之



航空戦を激化する

四月十二機以上を撃墜する戦果を挙げた。また帝國陸海軍航空部隊は四月中に敵に約七百機の損害を與へ、五月中には更にその戦果を増大して、約九百機の損害を與へてゐる。

なほ、支那方面のわが航空部隊は、連日地上作戦に協力すると共に、在支米空軍部隊に活躍し、六月一日より十二日までには飛行機三十一機（内不確実九機）失上五十四機、撃墜六十八機、合計百四十三機の損害を加へてゐる。

これらは既に報告されたところであるが、この航空作戦の大戦果は河南及び長沙作戦における地上作戦の戦果と共に、特筆大記されねばならぬものである。

敵機ミラツは「我々の太平洋作戦終局の目的は支那大陸に上陸することである」といひ、また東北方にも基地を占めたい考へからロッチ（上陸機）は「我々は北方に基地を有することにより百万人の人命の犠牲を減し得るであらう」といつてゐるが、これ等は其の航空基地を先づ我が本土近くにもめよとする敵の意圖の一端を暴露してゐるとみられる。

この視點からビルマにおける敵の反攻企圖を検討すると、敵が躍起となつて呼吸してゐるビルマ奪還の主要は、先づこれによつて、レド公路を打通することにある。

レド公路といふのは、東部印度における重要鐵道アッサム・ベンガル鐵道の北北西終點に近いチンキア附近から、北緯アライオン地帯を貫き、マインカンからモコリン、ミートキーナに出で、騰越、保山を経て雲南に至らんとするものであるが、騰越附近がわが軍の強力な陣地にある關係上、ミートキーナから東北方約五十キロのヒョウからヒョウを経て保山に至らんとする道も考へてゐるやうである。

皇軍のビルマ占領以來、例のビルマ公路はわが方の制するところとなり、亦連日對する有効な輸血路は空路を除くはか作無となつた。この對支米空路はチンキアから昆明を経て重慶に至るものである。

勿論この空路だけでは支那の軍力強化を全し得ないばかりでなく、在支米空軍の所須物資を充足し得ないので、將は聲を大にしてレド公路の急を叫び、米國は何とかして地上よりする補給路の打開を催つたわけである。殊に最近に至つては重慶空軍の主力といふものは悉く米國司令官ノートの指揮下にあり、飛行場の設定さへ米國が自らやるといふ態である。その機數も六百機以上に



なつてゐるといはれてゐる状況から思へば、米國としては一日も早くレド公路を開き、在支米空軍を強化擴張しようとしたことは首肯のできることである。

即ちレド公路の打通によつて支那大陸にまづ航空基地を

ワント・バフアンはスチルウエルの軍を指揮してゐる。
アウツト・バフアンと名んで更にイー・レックといふ男はインドの直接防衛に當つてゐる。即ち
東部印度軍
アウツト・バフアン
スチルウエル
オ・ヒン・レック・印度防衛軍



六月十六日午前二時、支那方面よりB24 B24二十機内外は北九州に飛来し、また南部朝鮮にも飛来して来た我が航空部隊は果敢にこれを迎撃、撃墜七機、撃破三機といふ見事な戦果を挙げた。しかも撃墜機中には敵機が燃焼しちねとつたB24も入つてゐり、その撃墜を北九州に報したのである。敵機の飛来した地方の人達も慌て中絶が本年訓練の程度をみせて、流石は神州大民族なりとの感を一様に與へ、まことに意を強くした次第である。しかし遂に敵は支那本土を基地として襲撃の如く我が本土を空襲し來つた。

また六月十五日には敵部隊がサイパンに上陸を企圖し來り、我が軍は前後二回これを水際で撃退したが、同日正午頃、三度飛来し來つて目下我が軍はこれと激戦中である。

この様相を観察するに、敵が我が本土に對し漸次その航空基地を進めて來ようとする意圖がいよいよ明瞭に看取せられるものである。

今次大東亞戦争において、航空作戦が有つ意義の重大なことは、既に各方面の状況に現れてゐる如く今更なる言を要しない。

従つてこれまでは、重要都市の確保争奪などの作戦意義が重要視されてゐたが、現在では、勿論その作戦目的によつても異つて來るわけであるが、これら要地の確保争奪が重要であると共に、航空基地の確保争奪、並びに敵航空基地の確保が重要な意味をもつて來てゐる。

支那方面のわが陸軍航空部隊は五月十二日戦爆連合の大編隊で、三次に亘つて在支米空軍の重要航空基地、揚子江飛行場を攻撃して所在の敵空軍に徹底的打撃を加へ、撃墜敵機七機、撃破敵機十機以上、小型機二十六機以上合計四十五機以上の撃墜なる戦果を挙げた。次いで五月二十九日、三十日の兩日には、揚子江の敵飛行場を襲撃し、大型機二十機以上、小

機を六機以上打ち墜した。その機數も六百機以上に達してゐるといはれてゐる状況から思へば、米國としては一日も早くレド公路を開き、在支米空軍を強化擴張しようとしたことは首肯のできることである。

即ちレド公路の打通によつて支那大陸にまづ航空基地を確保し、航空機による海上補給路の確保を狙ひ、或は日本本土空襲を企圖し、連日全面的に支那大陸を對日反攻の足場としよると考へてゐるとみられる。

だが、敵のビルマ奪回企圖は昨年の乾季まづ失敗に歸し、今年の乾季も彼等の欲するが如き成果をみることなく終つてゐる。

しかも、レド公路を打通して、大陸戦線の輸血路にせんとする狙ひは、米將領と英側とは必ずしもその熱意が同様とはみられないものがある。即ち前述の理由からしてレド公路打通は米國と英側とは極めて重大なる意義があるが、英側は例の自己保全主義のやり方から、何といつてもインド防衛が主眼なのである。即ち英側にとっては印緬の作戦はレド公路の問題よりもインドを如何にして守らうかといふのが第一になつてゐる。

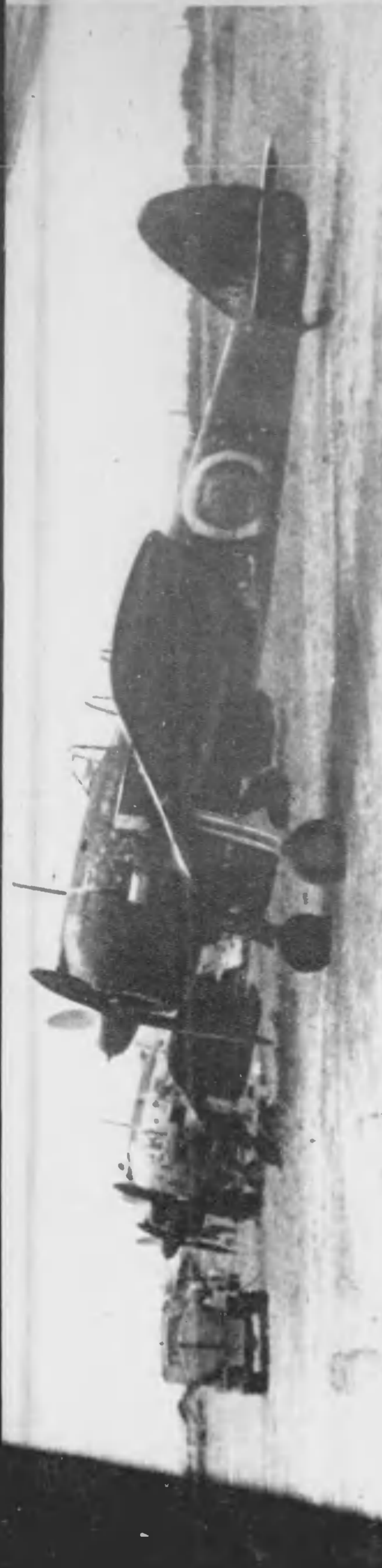
今こゝで印緬作戦における敵軍をみると、車では怒江を挟んで去秋陳武に代つて衛兵隊が雲南遠征軍を指揮して我が機群の陣に對してゐる。そしてこの雲南遠征軍はスチルウエルの率軍と密接に協力してゐる。北部では暹羅國の指揮する在印陸軍軍たる新編第一軍二ヶ師がアライオン地帯にゐるのであるが、これはその編隊編成に米式で、教育訓練もまた米軍から受けてゐて、従来の重慶軍に見えない強味を有つとせられ、この軍は米將スチルウエルの指揮下にある。スチルウエルはこれのほかに米英養成の約二ヶ師を指揮してゐる。インパール附近からアチドン、モンドク正面にある軍は英印軍であるが、これはワグント・バフアンの直接指揮下にある。そしてマ

しかるに先きに述べたレド公路の確保に關する米將領と英側との對立は、例へば敵はレド公路を開き、最も重要とされてゐるミートキーナに對し非常な無理をし、空挺部隊を送り、または北方から車隊を投擲させたのであるが、これに對する英中隊に對して英側は種々な口實を設け、必ずしも熱心ではない。

これを要するに近代戦において航空作戦のもつ意義は特に大きい。これが國內においても空襲行進隊が叫ばれてゐる所以であり、さらにこれと共に航空機を飛ばせる基地、所謂航空基地が極めて重要な意味を有つて登場して來てゐるのである。今や敵は何とかしてこの基地をわが本土に對し近づけようとし、しかもその努力は或る程度成功してゐる。即ち支那大陸を基地として既に今回の空襲があり、また東北方アック、キスカ附近は既に大規模に飛來するやうになつて、同方面からわが本土空襲は可能となつた。

今やもう本土は戦場となつた。しかもこれからの敵の空襲は必ずしも北九州に對するが如き小規模のものではなからう。あれはほんとに敵の小手調べとみてよからう。我々一億同胞ますます不運の決意を固めて、以て敵の本格的空襲に備ふべきである。

大本營陸軍報道部



大陸作戦 急速に進む

支那大陸に作戦の卓車
精銳は、まさに北支河南
作戦において重慶第一戦
區に徹底的打撃を加へた
が、引続き五月下旬中支
方面洞庭湖南湖備地区から
開始された敵第六戦區及
び第九戦區に対する進攻
作戦、いはゆる湖南作戦
においては、行動開始以
來僅か二旬で約十五師
の敵兵力に徹底的打撃を
與へ、六月十八日には湖



南の要衝長沙を三度攻略、益陽、鄂陽、湘潭等
を相次いで手中に収めると共に、今や在支米空
軍の最大前進基地衡陽を指呼の間に見守る進軍
中である

まさに神速軍勢、大陸を席捲しつつあるわが
陸軍の擴大に、軍機政權が躍る物心陣頭の軍大

な影響はいふまでもないが、重慶をあくまで、
抗日の第一線に立たせ、殊極においては支那大
陸を對日總反攻の基地ならしめんと企圖する敵
米英に與へた犠牲は更に大きく、今やわが作戦
の急展開と共に、敵は非常な動搖を示してゐる

在支米空軍軍機に勇躍出陣せんとするわが陸軍の
要衝——湖南戦線〇〇基地

熾々たる犠牲を以て進軍を続ける〇〇部隊——
湖南戦線



お水汲みあはれる軍兵に、師力を奮ふ民衆——
湖南戦線

頑強な敵のトーチカを削ぎしつゝ、一掃長沙へ——
湖南戦線

週間點描

ライオンをめぐる戦局の先途は激烈弾劾の
途をたどるのみ。これを今週の本誌發表によ
つてみれば、

一、大本營發表(昭和十九年六月二十日十六時四十分)
ライオン島に到着する敵艦は六月十五日午後四時の一
隻に増多する五隻に増強され、我々の砲撃に耐え、
我が守備部隊は多大の損害を蒙り、多大の損害を蒙
つた。

ライオン島附近海面に出現する敵艦は多量の機
銃弾を射撃する大砲部隊にして、在本軍
軍艦隊の本隊を四方に包圍中にして、我が航空部隊
は連日の敵艦隊に對し攻撃を加へたり
六月二十日以後六隻に増強する敵艦は先づ如し
敵艦隊は第一艦隊第二艦隊第三艦隊第四艦隊
第五艦隊第六艦隊第七艦隊第八艦隊第九艦隊第十艦隊
第十一艦隊第十二艦隊第十三艦隊第十四艦隊第十五艦隊
第十六艦隊第十七艦隊第十八艦隊第十九艦隊第二十艦隊
第二十一艦隊第二十二艦隊第二十三艦隊第二十四艦隊
第二十五艦隊第二十六艦隊第二十七艦隊第二十八艦隊
第二十九艦隊第三十艦隊第三十一艦隊第三十二艦隊
第三十三艦隊第三十四艦隊第三十五艦隊第三十六艦隊
第三十七艦隊第三十八艦隊第三十九艦隊第四十艦隊

二、大本營發表(昭和十九年六月二十三日十五時三十
分)我が航空部隊の部隊は六月十九日マリアナ群島
西方海面に於て三隻よりなる敵機隊を捕獲、先
頭機隊を打撃し、残機は二十日に及びその同機隊
空母機隊を捕獲、以上を撃沈し、敵艦二百餘隻

上を撃つるも決定的打撃を與ふるに至らず、わが
方航空部隊は、別無損捕獲、及び必死打撃五十餘
以上を及べり

以上の如くその血戦は相目とともに激烈を極
め、正に開戦以來の最大の重大戦局となつてき
たのである

われら前線勇士の死闘に應へて、又各自の職
場に死闘するを誓はら



戦力蓄積

戦力を蓄へよう。われらの血と汗、そして神州の
 生気が凝って戦力となり、敵の頭上に炸裂する日
 の壯絶さを思はう
 攻勢移轉の戦機は熟した。われらの昂まりつ、あ
 る戦力を以て、敵の非望を粉碎しようではないか
 さあ今だ、一億の力を結集して戦力を積まう

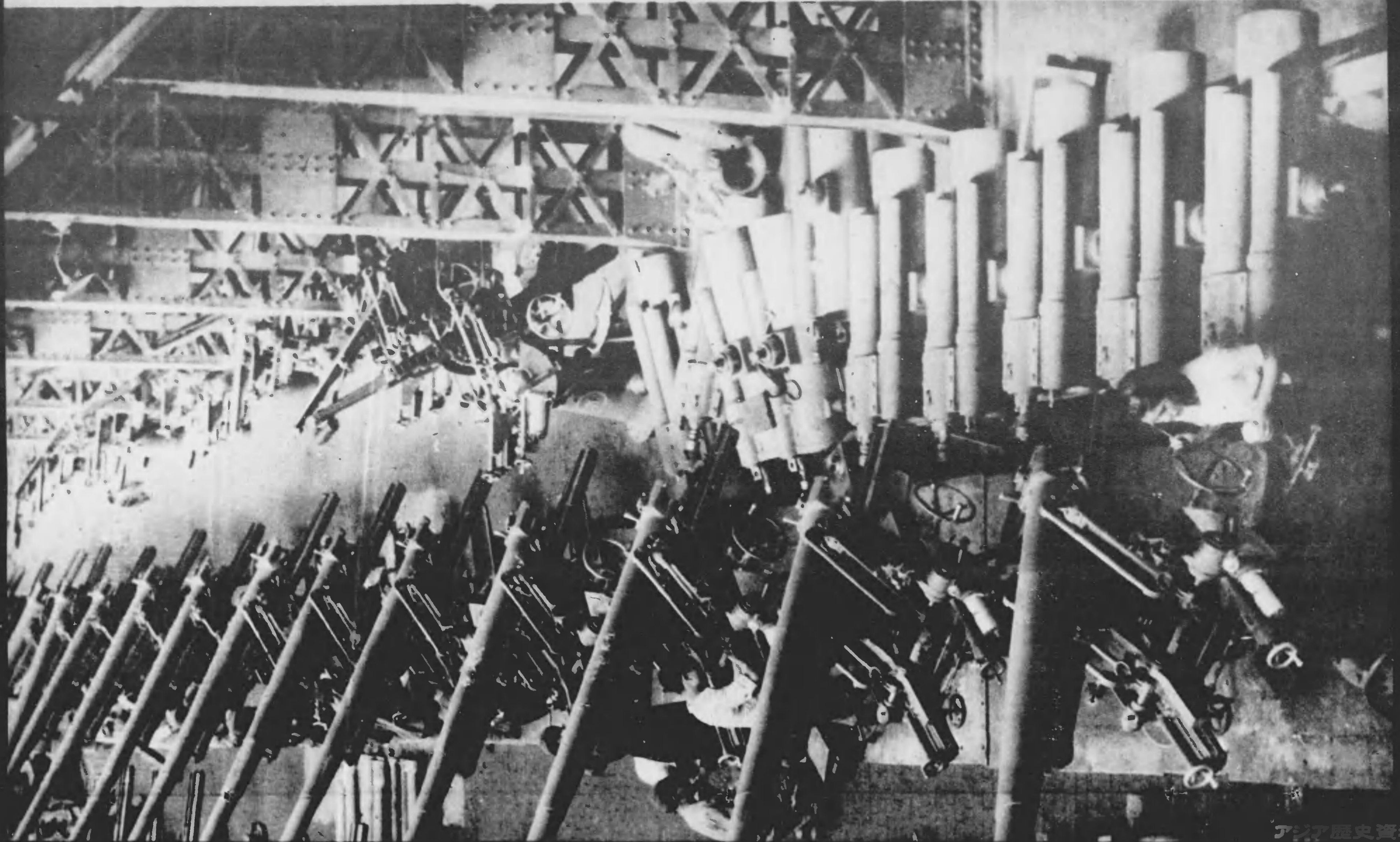
火砲は 續々前線に 送られる

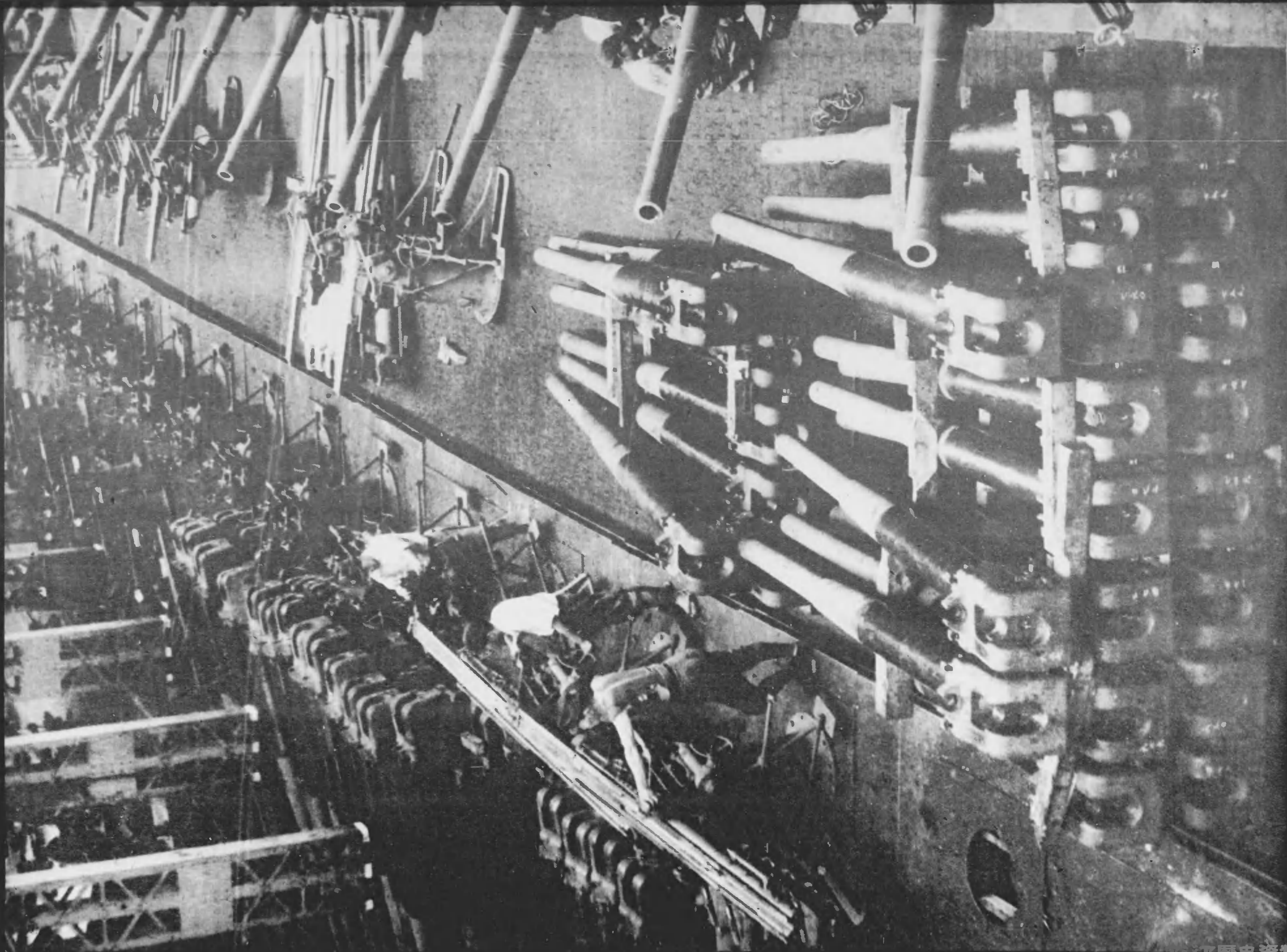
こんどこそ我が全力を發揮する時が
 来た。一發必中だ。きつとあいつらの頭
 上に情慾の弾丸をたしきこんでくれ
 くれくれくれくれ。敵の頭上まで飛ん
 であつてくれくれ。敵の頭上まで飛ん
 であつてくれくれ。その人々の祈りと念
 願が、いそぎ一億の憤りが、彼の頭上
 には沸つてゐる

彼の先軍は猛烈な火つたやつらの
 飛行機をにらみながら、ガスマスク、ア
 フに併せ、前進に放つた。しかし後編
 部隊はまだくみろぞ、ぞくく續く
 ぞ。みんな戦機にはやる心を擧げてひ
 しめてゐるのだ

□ 敵機の襲撃に次々と建立つてゆく陣地

—陸軍通信隊







「早く大人になれるように、地味な手つかりお世話をさせていただきます」と、新米車掌さん。この頃は鉄も手も手つかり故にとても



鉄道輸送に 女学生頑張る

名古屋市立第一高女

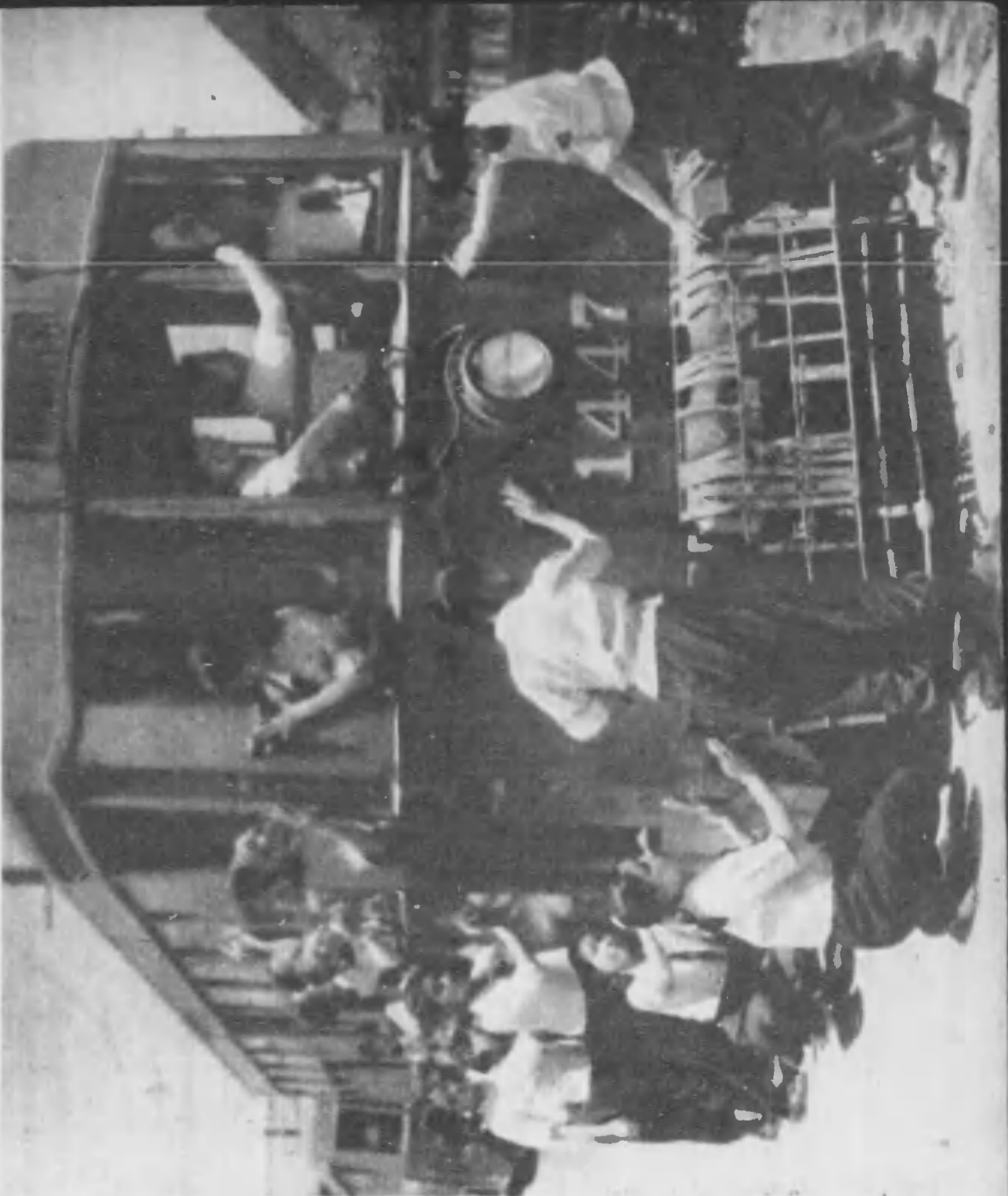
↑ 模型を指して、教習所の先生から
車内の説明をきく



「お父さんは名古屋駅前でございませう」チンチン。朝風の女学生車掌さんが下りつめの車内の人々に呼びかけておます。その若々しい聲に、いらいあちがちな人々の心もなごみ、車内にはいつも明るい空気があふれておます。この女学生さんたちは名古屋市立第一高女三年生で組織する女子挺身隊です

この四月以来、朝は早くから夕刻五時まで人ごみをわけて車内の整理にあつておたのですが、ほとんど全面的に車掌全部の仕事ができるようによそ十日間の教習所生活を経て、面目も新しく女学生車掌さんとして名古屋市の鉄道線路に華やかにデビューしたのです

「ウッ、そのコッ、そのコッ」と監督さんが機内世界の切替への真高講義。みんなの眼も大まじめ



「わたしたちの職場、きれいに片付けよう、準備もきまりたい」

「私も一人前の車掌さんです。乗客も新米車掌さんにも心ななしく」



涙

「おふくろはもう六十を越してゐる。毎日電報の来るのをどんな思ひで待つてゐたか知れないのである。電報！」

おふくろは、目撃した郵便配達が電報を投じて入るのを、一週間は経つてからである。アタマがツツカカと書いてある。時計を見ると、もう時半であつた。

おふくろはもう六十を越してゐる。毎日電報の来るのをどんな思ひで待つてゐたか知れないのである。電報！

おふくろは、目撃した郵便配達が電報を投じて入るのを、一週間は経つてからである。アタマがツツカカと書いてある。時計を見ると、もう時半であつた。

思はぬ効果

小泉 貞雄

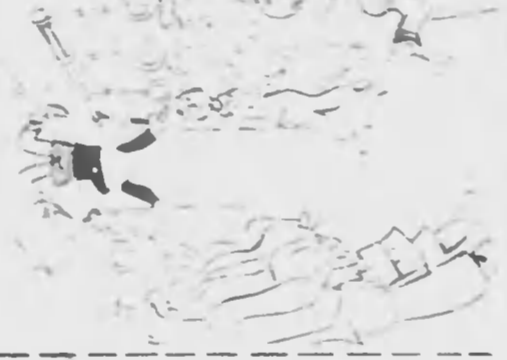
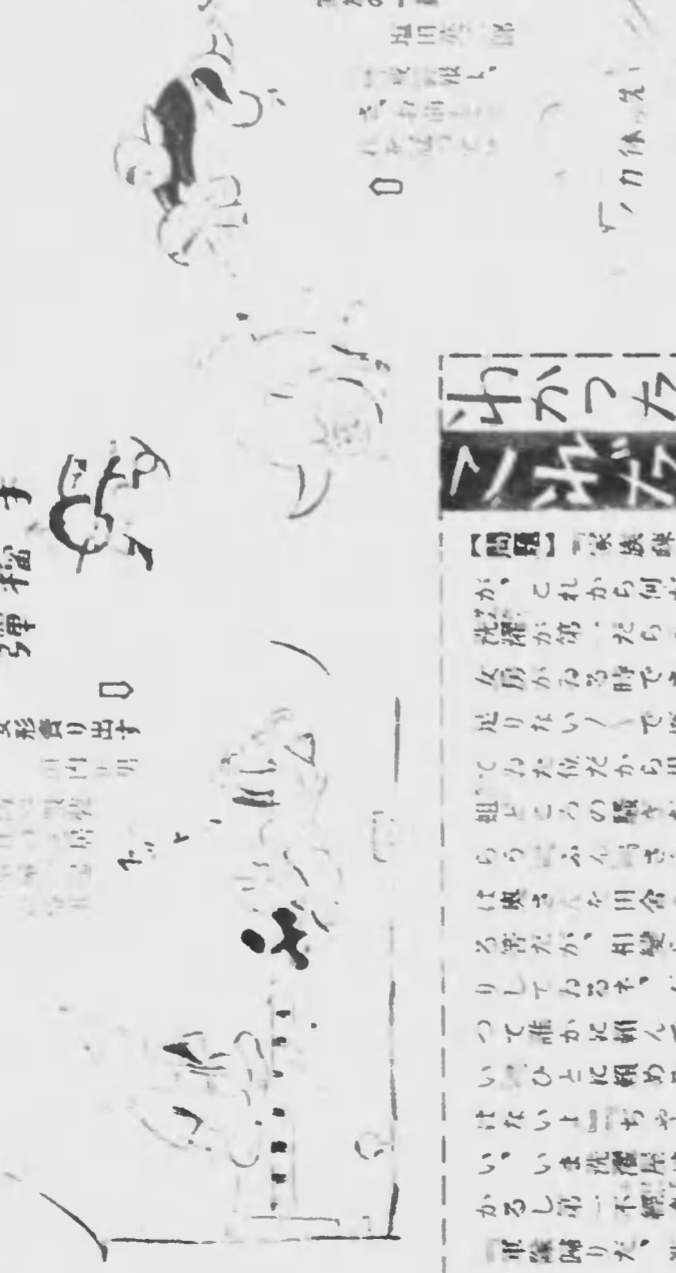
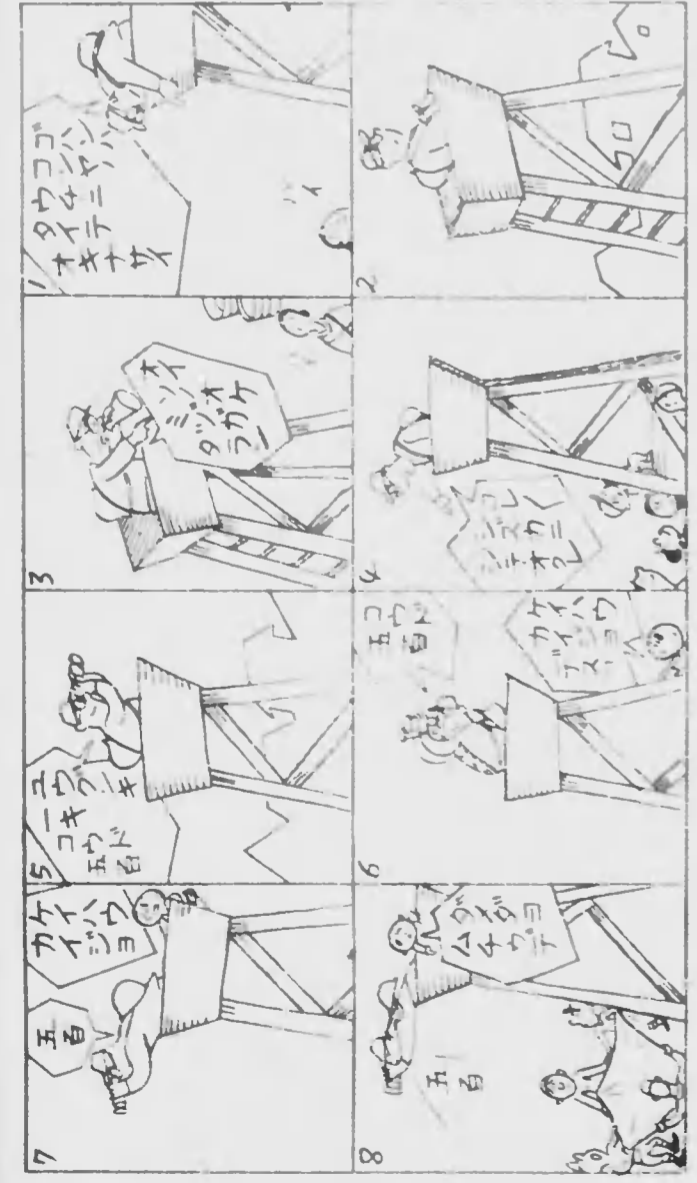


その元氣

出田英郎

「おふくろはもう六十を越してゐる。毎日電報の来るのをどんな思ひで待つてゐたか知れないのである。電報！」

漫画 弾槍



おふくろ！

「おふくろはもう六十を越してゐる。毎日電報の来るのをどんな思ひで待つてゐたか知れないのである。電報！」

麦の堆肥をつくらう



今年作付さんの大増産努力で、麦の大増産を遂げた。今年もこの増産をあげるため、今から十分の用意を怠らぬようにならねばならない。

昔から「麦はこやし」でつくるといわれてきた通り、麦の増産には特に肥料が大切なものだが、化学肥料の供給は現在の事情からみて、たとへば十分とはいきません。これを補ふために、はたして手回し肥料をつくらう。

政府では大政翼賛会・中央農産会と協力して、秋播付の堆肥を段階的に三百萬以上をつくらう。この運動は今年度の麦の増産を完全にするため、堆肥につみ込むこと、これだけの量の堆肥をつくるためには到底家畜糞だけでは足りませんから、草をできるだけ知りとり、その細切をすること、草を段々二、三枚に切つた時、その量は約九十貫、これを堆肥にしても百八十貫にしかりません。

政府はこのため、堆肥の増産にできる限り便利方法を講ずると同時に、農従や都市の人々に、勤勞奉仕をして貰ふことをたててゐます。大いに頑張つて、また来年の増産を今年以上の成績をあげるようによろしきではありませんか。

アトリエ工場

美しい彫像の立派なアトリエに開きなれぬ。このアトリエは東京第10区にある「朝倉文夫」の研究所である。所長朝倉文夫氏は人も知る彫刻の大家、朝倉文夫氏の技術奉公の一つとして、朝倉文夫氏の助手を養成し、この二月一人の彫像に、朝倉文夫氏の教名を加へた、朝倉文夫工場を開設し、朝倉文夫工場の下請製作を開始した。

丸来が器用な彫刻家ならぬこと、左から技術の進歩もあつた。時間には拘束されない自由作業であるが、技術奉公の誠心と仕事そのものを愛する朝倉文夫氏の指導を大いに受けてゐる。

百機店の工場化

